別府市立亀川小学校　校内研修

（第18回九州小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会）

1．学校教育目標について

夢を持ち、自ら学び続ける子どもの育成

めざす学校像	めざす児童像	めざす教師像
○静かで落ち着いた安心安全な学校 ○地域との関りを大切にする開かれた学校 ○子どもが生きき生きと活動する学校	○夢の実現に向け基礎・基本的な力が備わっている子 ○自分を客観的に見つめ、夢（なりたい自分・目標）や自分の考えを語る子 ○目標を持ち、それに向かって一生懸命頑張る子・相手を思いやる子	○子どもと保護者に寄り添う教師 ○自己の資質向上に努める教師 ○保護者や地域の人々に信頼される教師 ○「チーム亀川」として連携して取り組む教師 ○服務規律保持に努める教師

本校では、「夢をもち、自ら学び続ける子の育成」という学校教育目標を設定し、「なりたい自分を描いて、自分から一生懸命頑張る子ども」の育成を目指している。変化の激しい予測不可能な時代に生きる子どもたちに、どのような状況になろうと主体的に「学び続ける」姿勢を大切にしてほしいという願いが込められている。

新学習指導要領においては、「生きる力」を育むことをめざして、知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成が求められている。予測困難な時代の様々な変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合い、かかわり合っていく力の育成を重視する必要があり、本校が目指す教育「夢を持ち、自ら学び続ける子どもの育成」にも重なるところである。そして、その力を育むためには、学習材や出合う人々、仲間とのかかわり、つながりをもちながら、子ども自らが主体的に行う学習によって育まれるところが大きいと考える。学ぶ側に立つ授業づくりを進めていくことで、日常の暮らしの中でも子ども自らが考え、自分の夢の実現に向けて主体的に課題を解決していく姿が見られるのではないだろうか。そして、これらのことは、具体的な活動や体験を通して自分の生活を豊かにすることを目指す「生活科」や、探究的な活動に主体的・協働的に取り組み自己の生き方を考えることを目指す「総合的な学習の時間」の目標と一致するところである。

亀川小学校を取り巻く環境をみると、古くからの温泉地の面影を残しながら、漁港、商店街、住宅地、農業地域、いくつかの工場など多様な産業を持つ地域である。また、「太陽の家」など福祉関係の施設や病院、そして立命館アジア太平洋大学など国際的な人材を育成する大学もある。また、地域には障がいのある人や多様な国籍を持つ人が多く住む。こうした環境は、「生活科」「総合的な学習の時間」の素材の宝庫であり、体験活動や交流活動において、主体的な学びの姿を期待していきたい。

２．今年度の研究について

【研究主題】

子どもが本気になって考え続ける生活科・総合的な学習の時間

～自分で決めて　自分から動き　みんなで答えを探す～

【主題設定の理由】

子どもが主体的に探究的な学習を行っていくためには、一連の学習過程において、自ら課題意識を持ち、その意識が連続発展することが欠かせない。「もっと知りたい」「何とかしたい」という子どもたちの切実な思いや願いが根底に流れていなければならない。そのためには、指導者は、子どもの知的好奇心を刺激し、引き出し、探究意欲を高める工夫をする必要がある。そこで、「子どもが本気になって考え続ける生活科・総合的な学習の時間」の指導のあり方について、今年度も継続して研究を進めていく。

子どもが本気になるとは

〇自分で決めて

＊自分に合った学習方法や進め方を選び、学びを進めている。
＊自分で課題を決め、課題に対する考えや願いを持っている。

〇自分から動き

＊自分が何をすべきか判断して、自分から行動したり、考えたり、やり続けたりしている。
＊対象に試行錯誤しながら、向き合っている。

〇みんなで答えを探す

＊他者（友だち、地域の人たち、専門家など）とつながりを持ちながら、解決していく。

【研究内容】

①子どもの思いや願いを引き出し、探求し続ける単元構成の工夫

主体的な探究活動に導くためには、子どもたちが解決するための必要感や願いをもってゴールをイメージする必要がある。そこで、教師は子どもの思いや願いを引き出すための対象や事象「人・もの・こと」との出会わせ方の工夫や探究し続けることができる単元構成の工夫をすることが求められる。また、連続した探究活動につながっていくための課題設定について考える。

【視点１】
〇子どもの思いや願いを引き出すための対象や事象との出会わせ方
〇ゴールイメージを持ちながら探究し続けることができる単元構成
〇子どもたちの意欲が続くような課題設定

（昨年度の実践から有効とされる事）

〇感情の揺さぶりや知的な揺さぶりのある目的を持った体験活動は、主体的な学びの基盤となる。
〇子どもの思考に認識とのズレを生じさせる場面を仕組んでいくことは、思考の活性化の手立てとなる。

○相手意識をもった活動は、自分の考えの見直しやさらに良くしていこうとする学び続ける態度を育てることに繋がる。
○期待する学びの実現に向かうためには、ゴールとそのプロセスを明確に持ち、具体的に単元計画を描いていくことが大切である。

②「対話的学び」を深めるための表現活動の充実

「協働的な学び」は、気づきや学びが自覚化されたり、一人では思い至らなかった考えが友だちの考えに触発されて新たな疑問や学びが形成されたり、追究の意欲が強くなるという好循環が生まれる。「聴く（インプット）」ことと「対話（アウトプット）する」ことの繰り返しの中で、学びは深まっていくと考える。しかしながら、学習活動の中で、たくさんの事が見えている子どもいれば、そうでない子どもいる。また、活動の中で、様々な思考が働いても活動が終わってその場を離れてしまうと、気づいたことや思考したことを忘れてしまう子どもも少なくない。質の高い気づきや認識を引き出していくことが、対話的深い学びに近づくカギになると考える。学習活動の中で、課題解決に向けた対話が生まれるためには、表現活動の充実が求められ、意図的に手立てを講じていく必要がある。

【視点２】
○子どもの気づきや思考を言語化・可視化できる手立て

⇩

（昨年度の実践から有効とされる事）

○課題について
子どもの思考に沿った課題、全員で共有することができる課題は、対話の活性化につながる。
○交流のさせ方について
困り、気づき、考えの背景を全体で共有する事が対話、話題作り、見方の深まりにつながる。
○教師の支援について
・互いの立場を板書に位置付けることは、考えの変容を視覚的に捉えることができ、対話の活性化につながる。
・対話に必要な視点やポイントとなる言葉を意図的に板書に位置付けることは、対話の活性化につながる。
・対話の場におけるツールの活用については、「何を」「何のために」活用するか、吟味する必要がある。
・収集した事実を学びの足跡として掲示することは、子ども同士の協働的な学びを促したり、考えを持たせることに有効である。

③次の学びにつなげる「振り返り」の工夫

１時間の学習活動の最後に行う「振り返り」は、自らの学びを整理し、自らの変容や成長を自覚することができる。そのことにより気づきの質を高めたり、思考の深まりを明確に認識していくことにつながったりするであろう。自分の学習状況を俯瞰的に捉えることは、次はどうしたらいいのかを考えたり、新たな自分の目標（課題）を設定し、次の学習の見通しを持たせたりすることにつながり、連続した探究活動の課題設定を生み出すものになると考える。

【視点３】
○次の学びにつないでいくための「振り返り」

⇩

（昨年度の実践から有効とされる事）

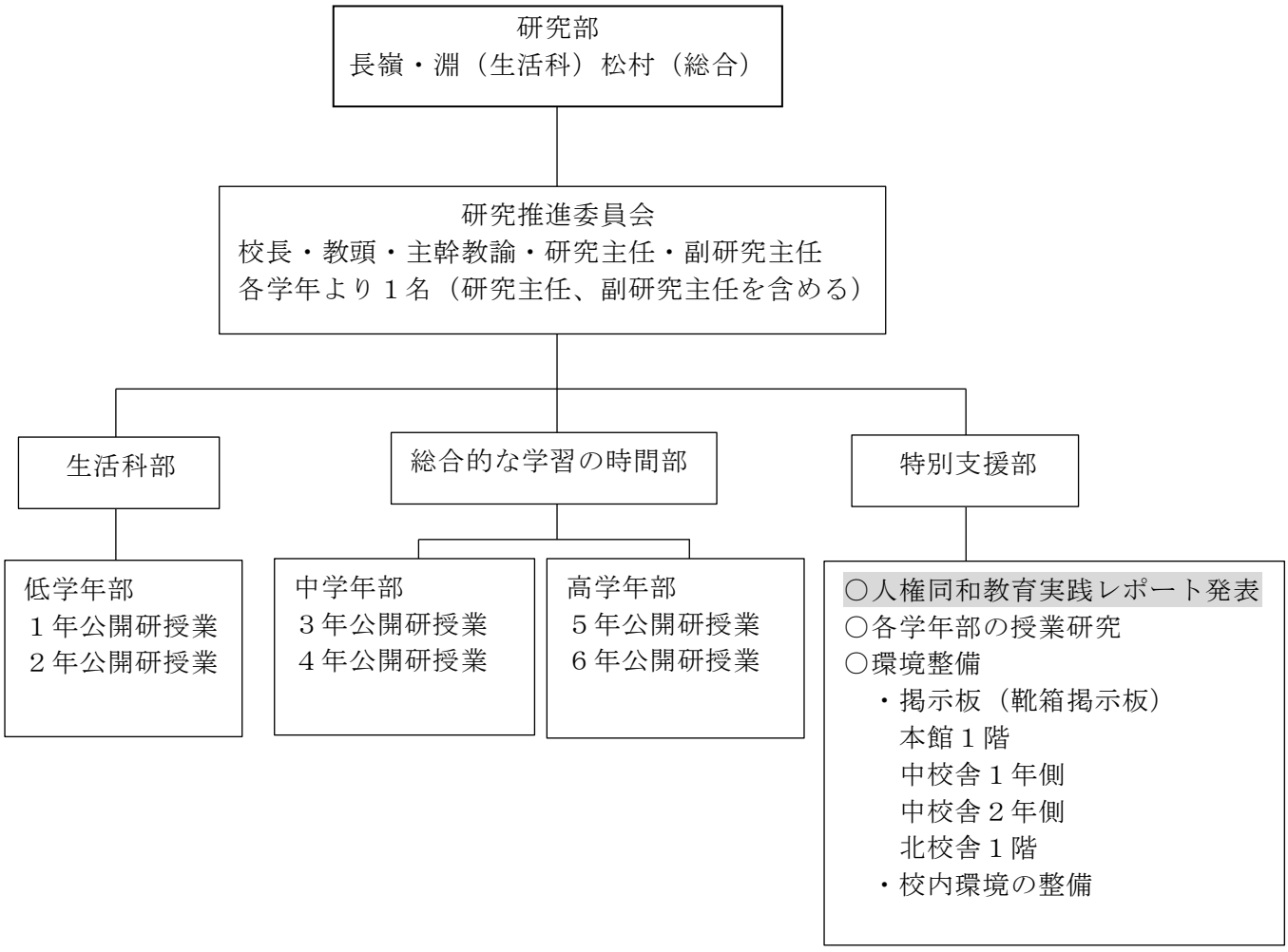
○振り返りの内容項目
・毎時間同じ内容項目にすることで、習慣化し、具体的に学びや発見について書けるようになった。
・「次の時間にすること・したいこと」という項目を入れると、次の活動で行うことが明確になる。

・自分の気持ちを書かせることで、次の活動への思いや願いに繋がっていく。
・めあてを立てた時、活動の視点を示すと、その視点に立ち返りながら振り返ることができた。

○振り返りの形式
・テンプレート的な記入例を示すことによって、何を振り返るのか具体的になった。
・言葉では上手く表現できない低学年の児童にとっては、度数など視覚的にわかるようにすると、教師も把握しやすい。
・ロイロノートを用いた振り返りは、学びが蓄積され、自己の変容を自覚できたり、共有が容易であったり、使い方次第でメリットがある。

３．研修計画と研究組織について

【研修計画】

４月	研究の方向性共通理解 単元計画・単元構想シート作成	
５月	単元配列表関連付け作成 総合・・・１学期の単元スタート	授業者決定（５月中旬）
６月	文科省より　加藤先生来校予定（提案授業） 指導案作成	
７月	単元配列表関連済み	
８月	指導案完成（本時案以外）	
１１月	１１月１５日　研究会	

【研究組織】